

平和の象徴に！紫電改引揚げ30周年記念



10/18

御荘文化センターで、昭和54年に久良湾で引き揚げられた旧日本海軍の戦闘機「紫電改」の引揚げ30周年イベント「あいなんからの祈り」記念セレモニーが行われ、関係者など約200名が参加し、「紫電改」の慰霊と平和への誓いを新たにしました。

同実行委員会の山下常臣委員長が、「紫電改を平和の象徴として若い世代に伝えていきたい」とあいさつし、南宇和高校美術部・放送部が制作したデジタル紙芝居『あいなんの紫電改』、『紫電改物語』、『紫のマップ』



「紫電改」

紫電改は、ゼロ戦に代わる新鋭機として終戦間近に開発され、局地戦闘機として戦争末期の日本本土防空戦で活躍し、海軍で最も優れた戦闘機だったといわれています。

昭和53年11月、久良湾の海底40mに原型のまま沈んでいるのが地元ダイバーによって発見され、翌年7月14日、実に34年ぶりに引き揚げられました。日本国内で現存する唯一の実機として馬瀬山山頂に保存・展示しています。

昭和20年7月24日に九州大村基地を発進した第343航空隊の紫電改21機は、豊後水道上空で米機動部隊艦載機約200機と交戦しました。その戦闘で未帰還機が6機あり、この紫電改はそのうちの1機であろうといわれています。





『紫のマフラー』の3作品が発表されました。

続いて、四国民舞輪の会が、紫電改にまつわる舞踊『鎮魂の子守唄』、『紫のマフラー』を披露し、同会会主で元陸軍航空隊員だった宮川和扇さん（八幡浜市）と、紫電改の元搭乗員だった笠井智一さん（兵庫県伊丹市）による対談が行われました。

また、馬瀬山山頂の紫電改展示館では、餅まきや物産市などが行われ、多くの家族連れで賑わいました。夕方には宇和海展望タワーのライトアップと竹灯籠1,600個が灯され、幻想的な鎮魂の灯火となりました。

『ニッコリ笑へば必ず墜す』「紫のマフラー」の逸話

大戦末期、本土防空に青春と命を賭けて戦った松山の第343海軍航空隊、『紫電改』の若き隊員たちと、隊員たちから母と慕われた食堂「喜楽」の女将との交流は、悲しい戦争時代のさなかに心温まる逸話を残しています。

昭和20年の正月に琴平の金毘羅宮を空中参拝した折、着陸に失敗して死亡事故が発生しました。新年早々不吉な事故に意気消沈していた隊員たちに、女将は「皆様は紫電改だから紫のマフラーを作ってあげる。マフラーの布は、私が結婚のときに持参した白無垢の布がある。これを紫色に染めて、そのマフラーには、済美高女の生徒さんに刺繍をしてもらおう。校長先生に私が頼んであげる。」と励ましました。

マフラーには隊員たち各自が想う文句を入れようということになり、済美高等女学校の生徒らが文字を刺繍し、最後に自らの名前を添えて隊員に贈りました。

『ニッコリ笑へば必ず墜す』は元紫電改搭乗員 笠井智一氏さんの編隊4機の搭乗員に贈られたマフラーに刺繍されていたものです。全部で38枚あった「紫のマフラー」は戦死者とともに1枚1枚焼失し、今では3枚を残すのみとなりました。その1枚が紫電改展示館に常設展示されています。

